

菩薩の信 (saddhā) について

—佛もまた過去佛の佛弟子か—

岩井昌悟
(東洋大学)

略号

AN = Aṅguttaranikāya

DN = Dīghanikāya

J-a = Jātaka-aṭṭhakathā

Kv = Kathāvatthu

Kv-a = Kathāvatthu-aṭṭhakathā ed. N. A. Jayawicrama

MN = Majjhimanikāya

MSV-sI = *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. by R. Gnoli with the assistance of T. Venkatacharya, Part I, Roma, 1977.

MSV-sII = *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. by R. Gnoli with the assistance of T. Venkatacharya, Part II, Roma, 1978.

Mvu = Mahāvastu-Avadāna, ed. Émile Senart, 3vols., Paris 1882-1897.

Pp = Puggalapaññatti

Pp-a = Puggalapaññatti-aṭṭhakathā

Ps = Papañcasūdanī (Majjhimanikāya-aṭṭhakathā)

Sn = Suttanipāta

Sv = Sumaṅgalavilāsini (Dīghanikāya-aṭṭhakathā)

『座標軸』= 勝本華蓮 『座標軸としての佛教学パーリ学僧と探す「わたしの佛教」』 佼成出版社, 2009年

『分別註』= 浪花宣明 『分別論註』 平樂寺書店, 2004年

『論事』= 佐藤密雄 『論事附覺音註』 山喜房佛書林, 1991年

0. 問題の所在⁽¹⁾

佛弟子(聲聞)が佛道修行を開始するのに、如來の菩提、つまり佛が本当に覺った者であることと、その覺りの価値を信じていなければ⁽²⁾、彼にとって佛の説く法も、それに従って修行するサンガも虚しいものとなろう。信がなければ、そもそも修行ははじまらない。それゆえ佛弟子の佛道修行には信が不可欠であることは疑いない。

しかしながら佛自身(獨覺も含む)は信を有するのか。またそこにいたるまでの菩薩(辟支菩薩も含む)は信を具えているのか、具えているとすれば、その対象は何か。これが本論の出発点となった疑問である。

佛については信を具えているように読み取れる資料がある。

もっともよく引かれるのが以下の句であろう。

私にとっては信が種、苦行が雨、慧が軛と鋤(saddhā bijam tapo vuṭṭhi, paññā me yuganaṅgaḷam)⁽³⁾

次に如來の五力である。

諸比丘よ、私はかつて未聞の法において通智究竟完成を得て「如來には5つのこれらの如來力がある。これらの力を具えて如來は最上位を自認し、衆会中に獅子吼し、梵輪を回す」と自認した。いずれの5

つか。信力・慚力・愧力・精進力・慧力である。⁽⁴⁾

またアッタカターでは J-a において、成道 5 週目に、菩薩にやぶれて気落ちしているマーラに、マーラの 3 人の娘が「私たちが彼を自由にして連れてくる」というと、マーラが「おまえたち、誰も彼（佛）を意のままにすることはできない。彼は揺るがない信において確立している」(na sakkā, ammā, eso kenaci vase kātuṃ, acalāya saddhāya patitṭhito eso puriso)⁽⁵⁾と語る。

佛が信を具えているとなると、その信の内容、対象が知りたいところであるが、現時点では明記する資料を見出せないでいる。しかしこの点については今後の課題にし、本稿では菩薩に焦点を当てる。

菩薩は信を具えているのか。具えているとすればその対象は何か。對告衆に諸菩薩が連なる大乘經典に親しむ人は、最初からこのような疑問にはいたらないであろう。なぜこのような疑問を生じたかと言えば、アビダルマ文献になるが、Pp などの正等覺者と獨覺の定義として、佛と獨覺は「未聞の諸法において」(pubbe ananussutesu dhammesu) 自ら (sāmaṃ) 覺るという規定があるからである。菩薩が過去世に過去佛に會ってその説法を聞いていて、しかも成道直前に、三明、特にその中の宿命明を獲得してから成道すれば、過去佛から聞いた法をも思い出してしまい、「未聞の諸法において自ら覺る」ことにならないはずである。佛法を知らずして修行に勤しむ菩薩を想定するならば、信があるかないかが問われることも首肯されよう。この点について何らかの説明をする資料を探し出し、その内容を検討したのが本論である。

なお本論では、南方上座部の見解の解明を目的とし、他部派の見解については参照程度にとどめる。特に説一切有部との見解の相違については今後の課題にしたい。

1. 正等覺者と未聞の諸法

パーリ七論の一つ Pp に以下の定義がなされている⁽⁶⁾。

いずれが正等覺者か。ここに、ある一類の人は未聞の諸法において、自ら〔四〕諦を現等覺し、そこで一切知を得て、〔十〕力において自在を得る。このような人が正等覺者である。

いずれが「獨覺者」か。ここに、ある一類の人は未聞の諸法において、自ら〔四〕諦を現等覺するが、そこで、一切知を得ず、〔十〕力において自在を得ない。この人が「獨覺者」である⁽⁷⁾。

ここで「未聞の諸法において自ら四諦を現等覺する」ことが正等覺者と獨覺とに共通である。両者の違いは一切知の有無、そして、十力において自在か否かにある。この「未聞の諸法」という表現はアピダルマを待つまでもなく、ニカーヤ、阿含、律藏等に類出する⁽⁸⁾。以下、獨覺は脇に置いて正等覺者に限って論じて行くが、「未聞の諸法」について Pp-a は以下のように説明する。

正等覺者の説明：「未聞〔の諸法〕において」とは最後生において、諦通達より前に他の誰からも聞いたことがない、の意である。それより多くの前生において一切知者の菩薩たちは佛の教えにおいて出家して三蔵を学び、往還の行法を行じて業處を隨順(anuloma)と種姓(gotrabhū)に届かせる。それゆえ最後生においてのみ無師であることについて言われている。なぜならその時、如來は波羅蜜を満たしているがゆえに、他者のもとで自ら聞いたことがない有爲無爲法において、自身で直接に經驗した智によって四諦を現等覺する⁽⁹⁾。

「法を聞いたことがない」のは菩薩の最後生に關してのみであって、前生は除外されると言うのである。そして前生には過去佛のもとで出家して

三蔵を學んでいる。つまり法を聞くのである。「業處を隨順と種姓まで届かせる」というのは、しかしながら、預流道に入らないことを意味する。

實は後述する MN81 Ghaṭikāra-s. ゆえに、菩薩が過去佛のもとで出家して三蔵を學んだことは認めざるを得ないので、このようなことを述べるのであるが、これは Kv の「入決定説」(niyāmokkantikathā) の議論とも深く関わっているので、先にこちらを見ておく。Kv では「菩薩(釋尊の前生のは)迦葉佛の教語において、入決定者となり、梵行を修する者となった」(bodhisatto kassapassa bhagavato pāvacane okkantaniyāmo caritabrahmacariyo ti) というアンダカ派の執見が、分別説部の立場から批判されている。行間から読み取れる分別説部の立場の前提になっている見解を箇条書きにすれば以下になるろう。

- ①菩薩は迦葉佛の聲聞(kassapassa bhagavato sāvako)ではない
- ②聲聞になってその後に佛になること(sāvako hutvā buddho hoti)はありえない
- ③〔菩薩は〕隨聞者(anussaviya)⁽¹¹⁾ではない
- ④世尊は自在生(sayambhū)である
- ⑤世尊は菩提樹下で四沙門果を現等覺する(bhagavatā bodhiyā mūle cattāri sāmāññaphalāni abhisambuddhāni)

また無師獨悟に關してウバカに對する宣言⁽¹²⁾、未聞法に關して初轉法輪の三轉十二行相を説く經文が引用されている⁽¹³⁾。

この議論の根幹にあるのが先に言及した MN81 Ghaṭikāra-s. の記述である。この經によれば、釋尊は前生においてジョーティパーラという名のバラモンであった時、迦葉佛から説法を聞き、具足戒を受けたことになっている。このことに關して Ps は以下のように説明する。

まず「それから、阿難よ、阿羅漢＝正等覺者である迦葉世尊はガティカ

ーラ陶工とジョーティパーラ青年婆羅門を法話によって教示し、訓戒し、
励まし、喜ばせた」(atha kho ānanda kassapo bhagavā araham sammā-
sambuddho ghaṭikāraṇ ca kumbhakāraṇ jotipālāṇ ca māṇavaṃ⁽¹⁴⁾
dhammiyā kathāya sandassesī samādapesī samuttejesī sampahaṃsesī)
という聖典の文章に對して、

「法話によって」とは、ここで念の獲得のための、宿住に關連した
法話と理解すべきである。なぜなら彼に世尊は「ジョーティパーラよ、
汝はつまらない状態に陥る衆生ではなく、大菩提座における一切知智
〔の獲得〕を願った方なのです。そのような方に放逸住は相應しくあ
りません」といった、念獲得のための法を説いたからである。しかし
海の向こうに住む〔インドの〕長老たちは「ジョーティパーラよ、私
(迦葉佛)が十波羅蜜を満たし、一切知智を得て、二万の比丘に圍まれ、
世を遊歩しているのとまったく同様に、汝も、十波羅蜜を満たし、一
切知智を得て、沙門の群れに圍まれ、世を遊歩するでしょう。そのよ
うな汝には放逸に陥ることは相應しくありません」と彼の心が出家に⁽¹⁵⁾
傾くように、そのように諸欲の過患と出離の利益を説いたと言う。

と説明している。

ここにはセイロンの説とインドの説の二説が説かれていると思われるが、
兩者いずれも菩薩がジョーティパーラであった時に迦葉佛から聞いた説法
の内容を、「念獲得のための宿住に關連した法話」、または、「諸欲の過患
と出離の利益」(kāmesu ādīnavaṃ nekkhamme ca ānisaṃsaṃ)までの説
法に限定することで、四諦や縁起といった内容について聞いていないこと
にしようとする意圖が読み取れる。⁽¹⁶⁾

つづいて「ジョーティパーラ摩納は應供 = 正等覺者である迦葉世尊のも
とで出家し、具足戒を得た」(alatta kho …… jotipālo māṇavo kassappa-

bhagavato arahato sammāsambuddhassa santike pabbajjāṃ alattha
upasampadaṃ⁽¹⁷⁾) という文章に対しては以下のように説明する。

「阿難よ、ジョーティパーラ摩納は迦葉 = 世尊 = 正等覺者のもとで出家することを得て、具足戒を得た」とは、出家してから何をしたのか。諸菩薩がなすべきことである。なぜなら諸菩薩は諸佛の面前で出家する。しかし出家してから、普通の人々のように「角の落ちた者」にならない。四清淨戒(別解脱律儀戒, 根律儀戒, 活命遍淨戒, 資具依止戒)において確立し、三蔵の佛語を学び、十三頭陀を受持し、阿蘭若に入り、往還の行法を満たし、沙門法を行い、觀を増大させ、隨順智まで觸れてとどまる。道果のためには精進しない。ジョーティパーラもそのようにだけ行⁽¹⁸⁾った。⁽¹⁹⁾

このように南方上座部は、釋尊は菩薩の時に過去佛のもので出家して具足戒を受け、しかも説法も聞いたけれども、聖者(四双八輩)には決してならなかった。それは迦葉佛の菩薩に向けて説いた説法の内容が四諦や縁起でなかったからであると説明することで、「未聞の諸法を自ら覺る」という規定と MN81 の間に生じる矛盾の回避を狙ったものと考えられる。

なお Kv から読み取れる見解の①と②が上の Pp-a, Ps と一見矛盾するよ
うに感じられるかもしれないが、Kv の「聲聞」(sāvaka)が「聖聲聞」
(ariyasāvaka)に限定されていると考えるなら、矛盾は生じない。

2. アッタカターにおける菩薩の信の對象

なにやら苦しい説明ではあるが、菩薩が前生において過去佛のもとで出家までしながら、最後生において未聞の諸法を自ら覺るということが可能になった。では菩薩は信を具えているのか。南方上座部はアッタカターに

において菩薩が信を具えることに言及している。次に菩薩の信が何を対象にするものか見て行く。

「五精勤支」⁽²⁰⁾、すなわち①「信を具える」、②「無病息災である」、③「詔わず、誑かさない」、④「精進に勤める」、⑤「慧を具える」の中の「①信を具える」を註釋する中に、信が(1)「到來の信」(āgamanasaddhā)、(2)「證得の信」(adhigamanasaddhā)、(3)「信賴の信」(okappanasaddhā)、(4)「淨信の信」(pasādasaddhā)の四種に分類され、「五精勤支」の「信」は(3)「信賴の信」であるとされるが、この中の(1)「到來の信」が「一切知菩薩たちの信は決意から到來しているから、到來の信と呼ばれる」(sabbaññubodhisattānaṃ saddhā abhinhārato āgatattā āgamanasaddhā nāma)⁽²¹⁾と註釋されている。菩薩が決意以降、この「到來の」信を有することは明らかであるが、何を対象とするのか、ここから知ることはできない。

DN16 Mahāparinibbāna-s. に説かれる五種の七不退法の中、三つめの七不退法の第一法は「比丘が信を持つ限り比丘たちに衰退はない」というものであるが、この信の註釋にも、「そこで來たるべき信、證得の信、信賴の信、淨信の信という四種の信がある。そこで來たるべき信は一切知菩薩たちにある」(tatha āgamanīyasaddhā, adhigamasaddhā, pasādasaddhā, okappanasaddhā ti catubbidhā saddhā, tatha āgamanīyasaddhā sabbaññubodhisattānaṃ hoti) とする。ここでは、先の āgamanasaddhā 「到來の信」は āgamanīyasaddhā 「來たるべき信」に變わっている。この箇所の復註によれば、

來たるべき行道から到來した信が「來たるべき信」である。それは殊勝であり、大菩薩たちが、他からの説示なしに、信すべき対象を顛倒せず⁽²²⁾に捉えて勝解することから、「一切知菩薩たちにある」という。

また AN の復註にも

來たるべき信は一切知菩薩たちに生じている。なぜなら、來たるべき行道から到來した信は殊勝であり、大菩薩たちが、他からの説示なしに、信ずべき対象を顛倒せず⁽²³⁾に捉えて勝解するから。

とある。

菩薩の信の対象は何かと言えば、これによれば、「他からの説示なしに捉えられるところの信ずべき対象」とも呼ぶべきものということになるように思われるが、これは答えにならないであろう。しかしながらここにも「他からの説示なしに」という言葉が見られることから、「未聞の諸法」の規定が菩薩の信の対象についても多大な影響を與えていることは看取される。菩薩に過去佛に對する信や佛法に對する信を付與することを躊躇させたのはひとえに「未聞の諸法」であろう。

註

- (1) 今回の研究のテーマは「佛は未聞の法を覚る」という規定と「菩薩の成道前の宿住隨念智獲得」と「過去佛のもとでの聞法」という3つの要素が一緒になると矛盾が生じるという點に焦點があり、そこに無理矢理「菩薩に信はあるか」の問題をからめたために複数のテーマが絡み合っ
て論旨が非常に分かりにくくなり、目的もぼやけてしまっている。口頭発表時にコメンテーターを務められた佐々木閑先生からその指摘と、今回は「菩薩に信はあるか」の問題は扱わずに、先の3つの要素の問題に絞
り、その成立の先後關係等を明らかにすることに集中した方がよいのではないかと
のたいへん有益なご助言を頂戴し、それにもとづいて訂正をしようと思っていたもの
の、諸事にかまけてほぼ発表時のままになってしまった(ただし発表時には聖典中
の記述から菩薩の信の内容を探る試みを行う部分があったが、これは資料整理に不備
があり、紙面の制限もあることなので削除せざるを得なかった)。最後まで訂正を考
えていたためにご連絡もせず、佐々木先生には多大なご迷惑をおかけしたことをこ
こにお詫び申し上げます。

- (2) 佛弟子の信の対象として「如來の菩提」が擧げられる用例としては以下のものなどがある。

AN 4-61, vol. II, p. 66: *katamā ca gahapati saddhāsampadā? idha gahapati ariyasāvako saddho hoti saddahati tathāgatassa bodhiṃ — 'iti pi so bhagavā arahaṃ sammāsambuddho vijjācaraṇasampanno sugato lokavidū anuttaro purisadammasārathi satthā devamanussānaṃ buddho bhagavā'ti. ayaṃ vuccati gahapati saddhāsampadā.*

居士よ、いずれが信具足か。居士よ、ここに聖弟子が信を具える。「かの世尊は應供、正等覺者、明行足・善逝・世間解・無上師・調御丈夫・天人師・佛・世尊である」と如來の菩提を信じる。居士よ、これを信具足という。

AN 5-2, vol. III, p. 11: *katamañ ca bhikkhave saddhābalaṃ? idha bhikkhave ariyasāvako saddho hoti, saddahati tathāgatassa bodhiṃ — 'iti pi so bhagavā arahaṃ sammāsambuddho vijjācaraṇasampanno sugato lokavidū anuttaro purisadammasārathi satthā devamanussānaṃ buddho bhagavā'ti.*

諸比丘よ、いずれが信力か。居士よ、ここに聖弟子が信を有して如來の菩提を信じる。「かの世尊は應供、正等覺者、明行足・善逝・世間解・無上師・調御丈夫・天人師・佛・世尊である」と。

なお以下、本稿において特に言及がない場合、パーリ語テキストは *Chaṭṭha Saṅgāyana Tipiṭaka 4.0 (CST 4.0; Text copyright © 1995 Vipassana Research Institute)* にもとづく。但し示した巻・頁は PTS のテキストのものである。

- (3) SN 7-1, vol. I, p. 172; Sn v. 77.
- (4) AN 5-11, vol. III, p. 9: *pubbāhaṃ, bhikkhave, ananussutesu dhammesu abhiññāvosānapāramippatto paṭijānāmi. pañc' imāni, bhikkhave, tathāgatassa tathāgatabalāni, yehi balehi samannāgato tathāgato āsabhaṃ ṭhānaṃ paṭijānāti, parisāsu sihanādaṃ nadati, brahmacakkaṃ pavatteti. katamāni pañca? saddhābalaṃ, hiribalaṃ, ottappabalaṃ, viriyabalaṃ, paññābalaṃ*
- (5) J-a, vol. I, p. 78.

- (6) 『舍利弗阿毘曇論』(T28, p. 585a-b) にも同様の定義が見られる。

云何聲聞人。若人從他聞，受他教，請他說，聽他法。非自思，非自覺，非自觀。上正決定。得須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果。是名聲聞人。

云何菩薩人。若人三十二相成就。不從他聞，不受他教，不請他說，不聽他法。自思，自覺，自觀。於一切法，知見無礙。當得自力自在，豪尊勝貴自在。當得知見無上正覺。當成就如來十力四無所畏。成就大慈，轉於法輪。是名菩薩人。

云何緣覺人。若人三十二相不成就。彼不從他聞，不受他教，不請他說，不聽他法。自思，自覺，自觀。上正決定。得須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果。於一切法，非無礙知見。非得自在，非得由力自在，非豪尊勝貴自在。非知見無上最勝正覺。非成就如來十力四無所畏。大慈轉於法輪。是名緣覺人。

「云何緣覺人。若人三十二相不成就。亦不從他聞。不受他教。不請他說。不聽他法。自思，自覺，自觀。上正決定。得須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果。於一切法，心無礙知見。心得自在。心得由力自在。心豪尊勝貴自在。非知見無上最勝正覺。非成就如來十力四無所畏。大慈轉於法輪。是名緣覺人。」(内容の重複が見られる「」内は不要か。)

云何正覺人。若人三十二相成就。不從他聞。不受他教。不請他說。不聽他法。自思，自覺，自觀。於一切法。知見無礙。得由力自在，豪尊勝貴自在。知見無上最勝正覺。成就如來十力四無所畏。成就大慈，成就自在，轉於法輪。是名正覺人

- (7) Pp p. 14, 73: katamo ca puggalo sammāsambuddho? idh' ekacco puggalo pubbe ananussutesu dhammesu sāmaṃ saccāni abhisambujjhati tattha ca sabbaññutaṃ pāpuṇāti balesu ca vasibhāvaṃ - ayaṃ vuccati puggalo sammāsambuddho.

katamo ca puggalo paccekasambuddho? idh' ekacco puggalo pubbe ananussutesu dhammesu sāmaṃ saccāni abhisambujjhati; na ca tattha sabbaññutaṃ pāpuṇāti na ca balesu vasibhāvaṃ — ayaṃ vuccati puggalo paccekasambuddho.

- (8) DN 14 vol. II, p. 33: samudayo samudayo ti kho bhikkhave vipassissa

bodhisattassa pubbe ananussutesu dhammesu cakkhuṃ udapādi, nāṇaṃ udapādi, paññā udapādi, vijjā udapādi, āloko udapādi.

比丘たちよ、ヴィパッシン菩薩に「生起、生起」という未聞の諸法において眼・智・慧・明・光が生じた。……

Vinaya vol. I, p. 11: idaṃ dukkhaṃ ariyasaccan ti me bhikkhave pubbe ananussutesu dhammesu cakkhuṃ udapādi, nāṇaṃ udapādi, paññā udapādi, vijjā udapādi, āloko udapādi.

諸比丘よ、「これは苦聖諦である」と私に未聞の諸法において眼・智・慧・明・光が生じた。……

『長阿含』 T1, p. 7c. : 過去菩薩觀 本所未聞法 老死從何緣 何等而有。……

『雜阿含經』 T2, p. 103c. : 此苦聖諦。本所未曾聞法。當正思惟時，生眼・智・明・覺・此苦集，此苦滅，此苦滅道跡聖諦。本所未曾聞法，當正思惟時，生眼・智・明・覺。……

『增壹阿含經』 T2, p. 619a. 然復，五比丘，此四諦之法。苦諦者，眼生，智生，明生，覺生，光生，慧生，本未聞法……。

『五分律』 T22, p. 104c. : 是法我先未聞。眼生智生明生覺生通生慧生。是法應知……。

『四分律』 T22, p. 788b : 苦聖諦本未聞法。智生眼生覺生明生通生慧生得證……。

MSV-sI p. 135: idaṃ duḥkham āryasatyam iti bhikṣavaḥ pūrvam ananuśruteṣu dharmeṣu yoniśo manasi kurvataś caḥṣur udapādi; jñānaṃ vidyā buddhir udapādi.

諸比丘よ、「これは苦聖諦である」と、未聞の諸法において、如理作意をなす私に、眼・智・覺が生じた。……

Mvu vol. III, p. 332: idaṃ duḥkham iti bhikṣavaḥ pūrve ananuśrutehi dharmehi yoniso manasikārā jñānaṃ udapāsi caḥṣur udapāsi vidyā udapāsi buddhi udapāsi bhūrir udapāsi prajñā udapāsi ālokaṃ prādurabhūsi.

諸比丘よ、「これが苦である」という未聞の諸法による如理作意から智・眼・明・覺・理解・智慧・光が現れた。……

- (9) Pp-a p.189: sammāsambuddhaniddese — **pubbe ananussutesū** ti pacchimabhavave saccappaṭivedhato pubbe aññassa kassaci santike assutapubbesu. tato purimapurimesu pana bhavesu sabbaññubodhisattā buddhasāsane pabbajitvā tīṇi piṭakāni uggahetvā gatapaccāgatavattaṃ āruhya kammaṭṭhānaṃ anulomaṃ gotrabhuṃ āhacca ṭhapenti. tasmā pacchimabhavasmiṃ yeva anācariyakabhāvaṃ sandhāy' etaṃ vuttaṃ. tadā hi tathāgato pūritapāramittā aññassa santike sāmaṃ ananussutesu saṅkhatāsaṅkhatadhammesu “idaṃ dukkhaṃ...pe... ayaṃ dukkhanirodhagāmini paṭipadā” ti attapaccakkhena nāṇena cattāri saccāni abhisambujjhati.
- (10) Kv pp.286-290, Kv-a p.77, 『論事』 pp.340-344, 『座標軸』 pp.87-88. なお Kv-a によれば, 「ここで決定あるいは梵行というのは聖道のことである。諸菩薩には波羅蜜の成就をおいてほかに決定と呼ばれるものはない。もしあれば, 菩薩は預流の聲聞ということになる(*niyāmo ti vā brahmacariyan ti vā ariyamaggassa nāmaṃ bodhisattānaṃ ca ṭhapetvā pāramipūraṇaṃ aññā niyāmokkanti nāma n' atthi. yadi bhaveyya, bodhisatto sotāpanno sāvako bhaveyya*)。
- (11) Kv-a p.78はこれを「隨聞者とは隨聞によって法に通達する者のことで, [アンダカ派は先に] 最後生について反対して, [後に] ジョーティパーラの時代について [隨聞を] 認める」(*anussaviyo ti anussavena paṭividdhadhammo. pacchimabhavaṃ sandhāya paṭikkhipitvā jotipālakāle anussavaṃ sandhāya paṭijānāti*) と説明している。南方上座部は菩薩を「隨聞しても法に通達しない者」とするのであり, 最後生については法を聞いていないからいうまでもなく, ジョーティパーラの時代は法を聞いたが法に通達しなかった(預流道以上の聖聲聞にならなかった)と言おうとしていると考えられる。
- (12) Kv p.289. *na nu vuttaṃ bhagavatā — sabbābhibhū sabbavidūham asmi, sabbesu dhammesu anupalitto; sabbañjaho taṇhakkhaye vimutto, sayam abhiññāya kam uddiseyyaṃ. na me ācariyo atthi, sadiso me na vijjati; sadevakasmim lokasmim, n' atthi me paṭipuggalo.*
世尊は言ったのではなかったか。「私は一切に勝った者, 一切を知る

者である。一切の諸法に汚されず、一切を捨て、渴愛の滅盡において解脱し、自ら證知しておきながら、誰を〔師と〕指定するだろうか。私に師はいない。私に等しい者はいない。神を含む世界において私に比肩する者はいない……」〔と〕。

- (13) Kv p. 290. *nanu vuttaṃ bhagavatā — idaṃ dukkhaṃ ariyasaccan ti me bhikkhave pubbe ananussutesu dhammesu cakkhuṃ udapādi, ñāṇaṃ udapādi, paññā udapādi, vijjā udapādi, āloko udapādi.*

世尊は言ったのではなかったか。「諸比丘よ、『これは苦聖諦である』と私に未聞の諸法において眼・智・慧・明・光が生じた。……」〔と〕。

- (14) MN vol. II, p. 48.

- (15) Ps vol. III, p. 281: **dhammiyā kathāyā** ti idha satipaṭilābhatthāya pubbenivāsapaṭisaṃyuttā dhammi kathā veditabbā. tassa hi bhagavā, — “jotipāla, tvam na lāmakatṭhānaṃ otiṇṇasatto, mahābodhipallaṅke pana sabbaññutaññāṇaṃ patthetvā otiṇṇosī, tādisassa nāma pamādavahāro na yutto” ti-ādinā nayena satipaṭilābhāya dhammaṃ kathesi. parasamuddavāsitherā pana vadanti — “jotipāla, yathā ahaṃ dasapāramiyo pūretvā sabbaññutaññāṇaṃ paṭivijjhivā vīsatisa-hassabhikkhuparivāro loke vicarāmi, evamevaṃ tvam pi dasapāramiyo pūretvā sabbaññutaññāṇaṃ paṭivijjhivā samaṇagaṇaparivāro loke vicarissasi. evarūpena nāma tayā pamādaṃ āpajjitum na yuttan” ti yathā ‘ssa pabbajjāya cittaṃ namati, evaṃ kāmesu ādinavaṃ nekkhamme ca ānisaṃsaṃ kathesi ti.

- (16) 釈尊の用いる施論・戒論・生天論・道論の次第説法において「諸欲の過患と出離の利益」は道論（四諦説法）の前に置かれる。

- (17) MN81 vol. II, p. 49. 對應する他の資料でも釋尊の前生とされる者が迦葉佛のもとで説法を聞いて出家することに違いはない。MSV-sII pp. 22-30, 『根本有部律破僧事』 T24, pp. 157a-158c, Mvu I, pp. 319-335.

- (18) 『分別註』 pp. 605-606.

- (19) Ps vol. III, p. 281: **alattha kho ānanda ...pe... pabbajjaṃ alattha upasampadan** ti pabbajitvā kim akāsi? yaṃ bodhisatthehi kattabbaṃ. bodhisattā hi buddhānaṃ sammukhe pabbajanti. pabbajitvā ca pana

ittarasattā viya patitasīṅgā na honti, catupārisuddhisile pana supatīṭṭhāya tepiṭakaṃ buddhavacanaṃ uggaṇḥitvā terasa dhutaṅgāni samādāya araṇṇaṃ pavisitvā gatapaccāgatavattaṃ pūrayamānā samaṇadhammaṃ karontā vipassanaṃ vaḍḍhetvā yāva anulomaṇāṇaṃ āhacca tiṭṭhanti, maggaphalattaṃ vāyāmaṃ na karonti. jotipālo pi tath' eva akāsi.

(20) 五精勤支を説くものとして DN33 Saṅgiti-s. vol. III, p. 237; DN34 Dasuttara-s. vol. III, p. 277; MN85 Bodhirājakumāra-s. vol. II, p. 95; MN90 Kaṇṇakattala-s. vol. II, p. 128; AN, vol. III, p. 65が擧げられる。

DN33 Saṅgiti-s: pañca **padhāniyaṅgāni**. idh' āvuso, ① bhikkhu saddho hoti, saddahati tathāgatassa bodhiṃ — 'iti pi so bhagavā arahaṃ sammāsambuddho vijjācaraṇasampanno sugato, lokavidū anuttaro purisadammasārathī satthā devamanussānaṃ buddho bhagavā'ti. ② appābādho hoti appātaṅko, samavepākiniyā gahaṇiyā samannāgato nātisitāya nācūṇhāya majjhimāya padhānakkhamāya. ③ asaṭho hoti amāyāvī, yathābhūtaṃ attānaṃ āvikattā satthari vā viññūsu vā sabrahmacārīsu. ④ āradhaviṛiyo viharati akusalānaṃ dhammānaṃ pahānāya kusalānaṃ dhammānaṃ upasampadāya thāmaṃ vā daḥaparakkamo anikkhattadhuro kusalesu dhammesu. ⑤ pañṇavā hoti udayatthagāminiyā pañṇāya samannāgato ariyāya nibbedhikāya sammādukkhakkhayāgāminiyā.

五精勤支。友よ、ここに比丘が、

- ①信を具える。「かの世尊は應供、正等覺者、明行足・善逝・世間解・無上師・調御丈夫・天人師・佛・世尊である」と如來の菩提を信じる。。
- ②無病息災である。冷たすぎず熱過ぎない、中くらいの、精勤に耐える、よく消化する消化器官を具える。
- ③諂わず、誑かさない。師や有智の同梵行者に對して如實に自身をあかす者である。
- ④諸不善法の放棄と諸善法の成就のために精進に勤める。勢いがあり、堅忍不拔であり、諸善法において責任を放棄しない。
- ⑤智慧を具える。生滅慧・聖慧・決擇慧・正しく苦の滅盡に導く慧を具え

る。

- (21) Sv, vol. III, p.1028, tattha sabbaññubodhisattānaṃ saddhā abhinihārato āgatattā **āgamanasaddhā** nāma. āriyasāvakaṇaṃ paṭivedhena adhigatattā **adhigamanasaddhā** nāma. buddho dhammo saṅgho ti vutte acalabhāvena okappaṇaṃ **okappaṇasaddhā** nāma. pasāduppatti **pasādasaddhā** nāma. idha okappaṇasaddhā adhippetā.

一切知菩薩たちの信は決意から到來しているから、「到來の信」と呼ばれる。聖聲聞たちの通達によって證得されることから「證得の信」と呼ばれる。「佛がいる」、「法がある」、「僧がある」と言われて、不動の状態で信賴することが「信賴の信」と呼ばれる。淨信の生起が「淨信の信」と呼ばれる。ここでは「信賴の信」が意圖されている。

3つめ七不退法の信の註釋（DN-a vol. II, p. 529）では sabbaññubodhisattānaṃ saddhā abhinihārato paṭṭhāya āgatattā āgamanasaddhā nāma として paṭṭhāya が入っている。

- (22) DN-ṭ vol. II, p. 165: āgamaṇiyapaṭipadāya āgatasaddhā āgamaṇiyasaddhā, sā sātisayā mahābodhisattānaṃ paropadesena vinā saddheyyavattṃ aviparītato ogāhetvā (gahetvā に読む) adhimuccanato ti āha “sabbaññubodhisattānaṃ hotī” ti.

- (23) AN-ṭ: tattha āgamaṇiyasaddhā sabbaññubodhisattānaṃ pavattā hoti. āgamaṇiyappaṭipadāya āgatā hi saddhā sātisayā mahābodhisattānaṃ paropadesena vinā saddheyyavattṃ aviparītato gahetvā adhimuccanato.